

## 歴史・文化教育について

区分	内容
項目	① 白河歴史の手引き「れきしら」の活用について
現状	<p>各学校図書館には、33冊が常備されており、各教室にも配付されている。</p> <p>市内各小・中学校では、主に「白河の歴史文化再発見！事業」で「れきしら」を活用している。</p> <p>本事業は、小学校1年から中学校3年までテーマを決めて体験的な学習に取り組むことで、自分の生まれた白河の歴史・文化を知り、ふるさとに誇りを持つことをねらいとしている。</p> <p>児童生徒が「れきしら」を活用して学習できるようにするために、小学3年以上の各学年で対象とする歴史・文化の題材(教材)について「れきしら」の掲載ページを明記した表を作成して、担任が指導しやすいようにしている。</p> <p>その結果、市内全小・中学校において、十分な活用が図られている。</p> <p>活用の仕方は、事前学習の資料、見学のガイドブック、まとめの学習の資料など、目的に応じて工夫されている。</p>
課題・懸案事項	<p>課題としては、第一に、活用する学年が限られてくるということである。</p> <p>表記や内容からすれば、小学校低学年での使用は困難である。 しかし、教師の適切な支援や工夫などによって、図や写真などで活用することも可能になるかどうか実践を通して検証する必要がある。</p> <p>第二に、「歴史・文化再発見！事業」以外での活用をどう図るかということである。</p> <p>ある学校では、社会科の資料として、6年で平安末期源平合戦の学習の際に「陣屋跡」を、江戸時代の学習の際に「小峰城」を関連して指導し、4年では郷土の発展に尽くす学習の際に「南湖公園」を関連して調べたという事例がある。 また、別な学校では、6年国語科で自分の町のパンフレットを作る学習があるが、そこで「れきしら」を活用した事例もある。</p> <p>このような成果を市内全学校に広げていく必要がある。</p>
目標及び対応方針	<p>「れきしら」をすべての学年、多くの学習で使用するためには、デジタル化が必要である。</p> <p>「れきしら」をデジタル化することで、低学年の授業などにおいて「れきしら」に掲載されている図や絵や写真などを提示することが容易になる。</p> <p>学習指導要領の改訂により、新しい時代に対応する資質や能力としてICT機器の活用が注目されている。</p> <p>デジタル化することで、ICT機器の活用と「れきしら」の活用が同時に可能となる。</p> <p>また、「れきしら」をデジタル化することで、「歴史文化再発見！事業」だけでなく、各教科及び各領域つまり学校の教育活動全体を通しての活用も可能となる。</p> <p>さらに、デジタル化によって「れきしら」に親しんだ児童生徒が、冊子を手に取りじっくりと読むということも期待できる。</p>